

なお、とくに気をつけなければならないことは、とかく教師は遊びの表面にばかり気を取られて、遊びに加われない子、遊びから逃げ出してしまった子、遊びからボイコットされてしまった子を見過ごすことが多いことです。

この子どもたちの次の活動を見ていますと、何か落ち着きがなく、充実した遊びができないようです。また、グループでの遊びが中途半端に終わったような時も、子どもたちはその後の遊びにおいて落ち着きがなくざわざわしたふんい気をかもします。

そこで幼稚園では、一人ひとりの子どもが遊びに没頭し、遊びを自分から作り出し、友だちと強い結びつきを持っていつでもどんな遊びでもできるようにし、しかもそれを楽しんでやれるようにすることが何をおいてもたいせつだと痛感させられます。

先日小学校の先生方との話し合いの時、幼稚園時代に、遊びに

没頭し、遊びを作り出し、友だちと仲よく遊んだ子どもが小学校でどんな態度をとっているか聞いてみましたところ、「物事をしっかりやる、教師の話を真剣に聞く、人に親切にする」などに発展しているということが立証されてさらに強い自信をもったわけです。

アメリカ合衆国のケネデー大統領は、二月十四日の議会に送った教書の中で、青少年の非行をなくす道は「機会を与える」ことだと強調していましたが、これはたんに非行青少年についてだけでなく、幼児教育についても通じることです。つまり、幼児が充実した生活ができるような遊びの場と内容、および人を準備してじゅうぶん充実した生活ができるような機会を与えることこそたいせつです。

(名古屋市立第三幼稚園長)

幼児の遊びと「社会」

神 沢 良 輔



幼児の生活の中心は遊びであり、それを通して教育していくということは、幼児の教育にあたるものにとつては常識であり、合意ことばのようにもなっている。

しかし、幼稚園という幼児の教育機関において、幼児の教育をしていく場合には、幼児にとつては同じ遊びであっても、家庭における遊びとは質的に相当の差異が認められなければならないだろう。すなわち、すくなくとも幼稚園における遊びにおいては、遊びという総合的な経験を通して、その中に教育的な価値をもつ経験が含まれるように配慮されているだろうし、教育的な価値をもつ環境というものが設定されているからである。

さらに、そのような遊びは、幼稚園においては、同一年令層の幼児をもつて構成されている集団のなかでなされているのである。このようなことは、家庭における遊びにおいては認められないであろう。そして、このことは、幼児の教育機関としての幼稚園の独自性を示すもつとも重要な原因と考えられる。

そこで、遊びを幼児の教育機関という場に限定してみると、幼児の遊びの質そのものが、幼児の教育の質に平行しているということになる。そして、それにもつとも大きな関係をもつものは、幼児の集団の質ということになる。

例えば、数人の子どもが砂場で遊んでいたとしても、ある子どもは砂を掘っている。ある子どもはトンネルを作っている。ある子どもは砂をかためて線路を作っている。そしてそれらの子どもたちの間には何の関係もないというような状態での遊びと、砂を掘っている子どもは、トンネルを作っている子どもは、どこへ砂を運んでいる。線路を作っている子どもは、トンネルとの連絡をつけるのに一生けんめいであるというような遊びの状態とは、相当な差異が認められよう。

すなわち、前者のような集団の状態では、集団といつても、それぞれ幼児がばらばらで、自分だけの遊びを通してのみ経験がなされることになるが、後者においては、集団のメンバー相互の経験の交流の中で遊びが成立しているといえる。そして、このような集団では、どうしても言語の交換が必要になるだろうし、遊びに必要なルールや役割ができたりするようになるだろう。だから、外見的には同じような遊びに見えても、経験の内容は質的に非常に高いものになっているといえる。

このような集団の質の問題は、幼児の経験領域である、いわゆる六領域のそれぞれについても同じようなことがいえる。例えば、「音楽リズム」においても、交替に演奏するようなことは、前者のような集団水準においては学習が不可能となる。また、「言語」においても、前者のような集団では、話をする必要がな

いので、言語についての経験をすることはないであろうし、もし、話をしたにしても、その話は、集団の成員一人ひとりにとっては承認しなくてもよいことになるので、言語の内容についての質的な向上は認められないということになるだろうし、意味のない一人ごとになる恐れもある。

このようにみると、幼児の遊びと集団の質との関係は、保育そのものを考える上での中心的な課題とならなければならぬだろう。

これまでのべてきたことは、幼児の教育にあたるものにとって、どうしても押えておかなければ教育できないものに、幼児のそのときそのときの集団の理解と、その発達についての見通しということがあるということである。それは、六領域といわれているもののどれかを中心に保育する場合でも同じことになるであろう。そして、このことは、幼児の経験の質にも関係し、望ましい経験といわれているものの本質的な内容を構成するものといえるのである。

(二)

さて、幼稚園の教育内容として、「社会」の領域で強調したいことは何かということ編集部から要求されて、それを念頭においてこれまでのべてきたのであるが、どうも前述のことは、その

ことに直接結びつかないようなことになってしまったかも知れない。

しかし、すくなくとも、幼稚園における幼児の教育においては、幼児の集団の質とか、集団の発達というものによる経験の内容の質の相異や変化がはっきりしない限り、経験の平板的な面については押えることができるにしても、それだけで幼児の望ましい経験がされたということにはならないだろう。もちろん、実際の保育場面においては、先生方は、幼児ととりくんだ経験をもとにして、幼児の経験の質が向上するように、上手に指導しておられる。だが、このようなことだけでは、この問題を解決したことにはならないだろう。

それで、筆者の提示した問題を、仮に六領域に分けて入れるとしたら、「社会」の領域に入れられることになるであろう。もちろん、この領域においては、他にも入れるべきものが当然ありうるが、このことこそ「社会」でもっとも中心にしてほしいと考えるのである。

なお、現行の教育要領では、このような面に関しては、はっきりとした記述はない。だから、ここでのべたことは、教育要領というものが、どういうものであるかということの議論を問題の外においての私見であることを付記しておかねばならない。